

バレーボールのチームづくりに関する研究
—コーチのスターティングメンバー構想について—

濱田幸二
鹿屋体育大学

キーワード: バレーボール, チームづくり, コーチング・アクション, 選手特性

【要 旨】

本研究は、大学女子バレーボールチームの構成メンバーの特徴(コーチからみた評価)をもとに、チーム状態に応じて最適なスターティングメンバー構成とコーチング・アクションを調査し、コーチがどの様にチーム作りを考え、スターティングメンバーを決めて行ったかを様々な事象から検証するものである。また、当初コーチが考えていたスターティングメンバー構想が計画通りに進まなかった場合、「負」と考えるのではなく、「正」と考え選手強化及びチーム強化に結びつけることが重要であると思われた。

スポーツパフォーマンス研究, 1, 42-48, 2009年, 受付日:2008年11月28日, 受理日:2009年2月24日
責任著者:濱田幸二 〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1 鹿屋体育大学 hamada@nifs-k.ac.jp

**Volleyball team building in relation to the coach's plan
for the starting lineup**

Koji Hamada
National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

Key Words: volleyball, team building, coaching, players' characteristics

[Abstract]

The present study investigated optimal configurations for the starting lineup for a university women's volleyball team based on the coach's evaluation of the team members, and evaluated the coach's opinion of team building and decisions about the starting lineup. When the starting lineup did not work as planned, it seemed to be important to evaluate this positively, rather than negatively, in order to get ideas for strengthening the players and the team.

I. 目的

バレーボール競技などのチームスポーツにおいて、戦術・技術を指揮・指導するコーチの役割は多岐にわたっている。また、勝利をチームの目標に挙げているチームにおいては、チームを構成する選手個々人の能力(戦術、技術、体力、精神力)の向上(中西, 2002)と、その選手の能力を最大限に発揮させることが出来るように適材適所に配置し、最強のチームをつくらなくてはならない。しかしながら、ただ単に「選手強化」を行うことが、直結して「チーム強化」になるとは限らない。なぜならば、選手一人一人が独自のパーソナリティーを持つ限り、選手間の整合・相互関連(吉田, 1993)を無視してチームは築き上げることは困難だからである。また、ケガや諸事情によってコーチが構想したチームにならないこともよくあることである。

そこで、本研究は大学女子バレーボールチームを対象に、コーチ(筆者)から見た選手個々人の特徴を参考に、スターティングメンバー決定に至る経緯を調査し、また、試合での戦い方及び結果を合わせて検討するものである。

II. 研究方法

1. 調査対象選手

K 大学女子バレーボールチーム(以下 K 大学)の構成メンバーと、そのメンバーの中から選ばれたスターティングメンバー(レギュラー)で行われた試合を調査対象とする。この構成メンバーについては、学年、ポジション、大学入学後の主な戦績、身長及びコーチ(筆者)が見た特徴(コーチ評)を記載した。

表1. K大学女子バレーボール部の構成メンバー一覧

選手	学年	ポジション	身長	主な戦績	コーチ評
1MR	4	セッター	165cm	ユニバシアード 日本代表	身体能力が高く、トスワークも国内トップクラス、リーダーシップ(主将でもある)がありチームの大黒柱。戦術理解度も高く、攻撃も出来、競技者として完成しつつある。
2MK	4	センター・ ライト	174cm	元ユニバシアード 日本代表	昨年までユニバ日本代表になっていたが、若手の台頭でポジションを奪われつつある。ブロック力と経験値は豊富だが、攻撃力に関し伸び悩んでいる。
3SM	4	オール ラウンド	170cm	インカレ B8	攻撃力に優れ、どのポジションからでも攻撃することが出来る。ブロック力と守備力が弱い。
4KR	4	レフト・ リベロ	172cm	インカレ B8	レセプションのスペシャリスト、試合勘が良くゲームメイクが出来る。チームのムードメーカーで、この選手のプレイでチームに勢いが出る。
5HR	3	センター	180cm	ユニバシアード 日本代表	高さ、パワーと試合勘は十分持っている。プレイにムラがあり、安定感に欠ける。
6AI	3	ライト	170cm	—	打点の高いスパイクが魅力であるが、守備においてボールコントロールが不安定。
7FY	3	リベロ	156cm	ユニバシアード 日本代表候補	スパイクレシーブは国内トップクラス、練習熱心でレセプションも安定してきた。
8SR	3	センター・ ライト	174cm	—	相手との駆け引きやネット際のプレイがうまいが、プレイにムラがある。
9KY	2	レフト	170cm	—	入学早々怪我をして、未だにコートに立っていない。潜在能力は高く完治すれば十分レギュラーとして活躍が期待される。
10TM	2	ライト	170cm	インカレ B8	チームのポイントゲッター、各大会でスパイク賞を取っている。守備力に難があったが、練習熱心で徐々に克服している。
11IT	2	レフト	167cm	インカレ B8	ジャンプ力に優れ、攻撃力は十分ある。試合中視野が狭くなりミスが出る。
12KH	2	レフト	172cm	ユニバシアード 日本代表	攻守共将来性がある。柔軟性に欠けているため切り替え動作のときミスが出る。
13NN	2	セッター	165cm	—	経験値は十分ある。フィジカル不足のためジャンプ力及び俊敏性は無いがミスの少ないプレイヤーである。
14SS	2	レシーバー	168cm	—	スパイカーからレシーバーに転向して1年、徐々にポジションに慣れてきている。
15US	1	レフト	176cm	—	ブロック力は優れているが、体力、精神力と将来性は未知数である。
16IR	1	センター	177cm	—	高さ(ジャンプ力)があり、速攻の決定力が高い。ブロック力をつければレギュラーに固定されるだろう。
17MC	1	ライト	174cm	—	ブロック力とレシーブ力に優れている。速攻は打てるが高いトスに対して体重を乗せて打つことがまだ出来ない。
18NM	1	レシーバー	160cm	—	レシーブのボールコントロールに優れ、サーブを強化するとピンチレシーバーとして出場機会が出る。

2. 調査対象試合

試合の結果、個人技術(レセプション、スパイク、サーブ、ブロック)の結果も調査対象として算出した。

表2 試合結果

対戦相手	FK大学	NK大学	F大学	DY大学	S大学	SN大学	SJ大学	得セット	失セット	得点	失点
K大学	25-19	25-18	25-12	25-13	25-17	26-24	25-6	21	0	526	347
	25-19	25-21	25-20	25-16	25-10	25-12	25-22				
	25-23	25-20	25-18	25-13	25-15	25-14	25-15				

備考: 試合は、1セットも落とすことなく、完全優勝であった。網掛けは主力3名不在時の試合。

表3 個人技術成績(試合に出場した選手のみ記載)

	レセプション返球率	スパイク決定率	サーブ得点率	ブロック得点	出場試合数
1MR	100% (1/1)	37.5% (3/8)	7.7% (3/39)	1	3
2MK	0% (0/0)	37.1% (23/62)	4% (2/50)	14	4
3SM	0% (0/0)	50% (9/18)	0% (0/4)	0	4
4KR	73.8% (31/42)	34.1% (31/91)	8.7% (6/69)	4	4
5HR	0% (0/0)	35.3% (18/51)	8.6% (3/35)	5	3
7FY	69.5% (73/105)	0% (0/0)	0% (0/0)	0	7
8SR	0% (0/2)	42.7% (44/103)	4.7% (4/85)	7	7
10TM	66.7% (8/12)	47.5% (65/137)	5.7% (4/70)	13	7
11IT	67.3% (66/98)	38.4% (63/164)	2.5% (2/79)	8	7
12KH	68.7% (46/67)	35.4% (29/82)	15.8% (6/38)	1	3
13NN	0% (0/0)	20% (1/5)	2.5% (1/40)	1	4
16IR	0% (0/0)	35.7% (5/14)	16.7% (1/6)	0	7

3. 調査内容

構成メンバーから、コーチが構想するチームづくり(スターティングメンバー構想)と、チームづくりの過程(コーチング・アクションとしてスターティングメンバーの修正)を調査する。また、今回試合期間中(全7試合中4試合)に3名の選手が日本代表として海外遠征に行ったため、コーチが構想するベストメンバーではないチームで試合に望まなくてはならず、そのような状況の中でスターティングメンバーを決定し、チームづくりを行った過程についても考察を加えることとした。

Ⅲ. 事例及びコーチング・アクション

1. 3ヶ月前のスターティングメンバー構想について(基本構想)

コーチが、スターティングメンバー(レギュラー)を決定するに当たり、いくつかの項目がある。K 大学のコーチの場合表4で示す順序で決定していく。また、決定する時期はチームゲームの場合、お互いのコンビネーションやポジション取り等複雑に絡み合うので、早ければ早いほうが良く、早期に固定(決定)してチームをつくっていたほうが良いと思われる。

表4 スターティングメンバーを決定する項目

優先順位	決定項目
1	ポジションごとの役割の質の高さ
2	試合での対応力・試合勘
3	戦術遂行能力
4	メンタル(冷静・強気)
5	団結力・リーダーシップ・コミュニケーション能力
6	フィジカル・ケガに強い
7	将来性

今回は試合が始まる3ヶ月前に、これまで試合での活躍度合いからコーチが構想していたスターティングメンバーは、図1のような構想であった。これはセッター1MR を中心にチームづくりを第一に考え、センター1、レフト1とライトに得点力(攻撃力)のある選手を配置する。センター2はブロック力がありセッターの前(AクイックかBクイック)で攻撃が出来る選手、レフト2はレセプションをリベロと2人で行い、前衛攻撃陣が2人のときはバックスパイクが打てる選手と考えた。従って、ライト:10TM、センター1:5HR、レフト1:12KH、センター2:2MK、レフト2:4KRとなった。しかし、リベロの7FYは、スパイクレシーブは良いがレセプションに安定感が未だ無い。4KRの方がレセプションの安定感が良いので4KRのリベロも考えられ、そうなるとレフト2は11ITも考えられる。



図1. 試合3ヶ月前の構想

2. コーチング・アクション(ポジションを競わせる)

まず、はじめに全体的な練習計画で守備を中心に行った。その中で、7FY と4KR をリベロとして各場面で起用し、ひとつのポジションを競い合わせることにした。そうすることで、7FY は自分の長所であるスパイクレシーブを今まで以上積極的にを行い、レセプションにおいても積極的に練習に取り組むようになった。一方4KR は、これまでエースとしてスパイクで自分やチームを盛り上げていたが、守備専門のリベロということで、ストレスがたまり思うようにレセプションも返らなくなった。

3. 日本代表でチームの中心選手が不在になる(構想の変更)

試合2ヶ月前になり、国際大会の日程が試合と重なることが決まり(全7試合中4試合)、その大会に K 大学からセッター1MR、センター5HR とレフト12KH が選出され派遣されることになった。4KR をリベロとして考えていたが、スパイカーがいなくなることで4KR をレフト2に戻し、図2のような構想に変更した。

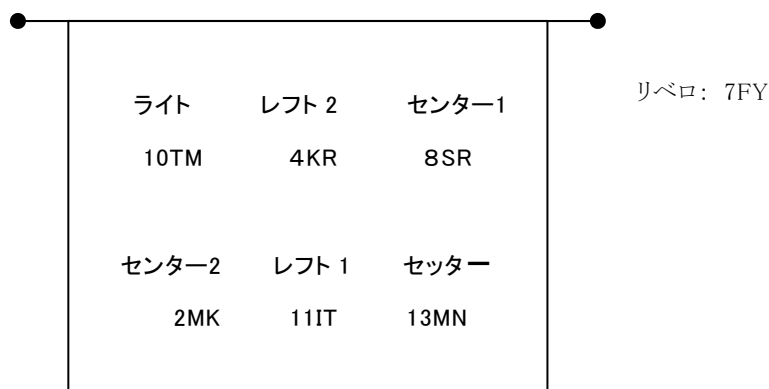


図2. 試合2ヶ月前の構想

4. コーチング・アクション(構想変更の練習を行わない)

試合まで2ヶ月間、チームの要でセッターの1MR が不在になることはチームにとって、大変な戦力ダウンである。しかしながら、守備の要(4KRと7FY)と攻撃の要(10TM)がいることで、今まで1MR がいたことで出番が無かった新人セッター(13NN)に出場の機会が訪れるいいチャンスである。K大学のチームは選手18名からなり充分2チーム(A・B)つくることが出来、チーム内で切磋琢磨できる。そこで、3名が入ったK大学として最強のチームと試合に出る3名が入ったBチームを強化することにした。また、このようにした理由は、試合は後半の3試合が力のあるチームと戦うことになるため、また、今年1年の強化方針(構想)を変えず、3名が入ったチームの構築を考えたからである。

5. 試合結果からみた考察(構想の評価)

表1で示すように、主力3名不在時においても4試合全てストレート勝ちを修め、これまで試合出場機会が無かった(少なかった)選手も活躍したと考えられた。また、3名がチームに戻ったとき(帰

国6日後に試合)もコンビネーションの乱れも少なく、チーム一丸となって失セット0の完全優勝を成し遂げた。チームから離れた3名が出場した国際大会は、劣悪な環境の中で日本チームが優勝を飾った。1MRは日本チームでも主将を務め優勝に大きく貢献した。この3名の選手は、K大学を離れ「チームメイトに申し訳ない。その分みんなのためにも頑張る」という思いが結果に結びつき、帰国後もスムーズにチームに溶け込み結果が出せたと思われた。

IV. まとめ

チームづくりは、コーチが構想する計画通りに進めばよいが、諸事情が入り困難を強いられる。しかしながら、その状況を「マイナス」として考えるのではなく、「プラス」として考え常に選手強化、チーム強化に結びつけるよう適時利用しなくてはならないと考えられた。

今後、コーチング・アクションの評価について、現場で選手と接しているコーチのチームづくり構想と、コーチングを受けている選手に内省を調査し、両者間の一致及び不一致(乖離)を考察する必要があると思われた。

V. 引用・参考文献

- ・新井貞光(1981)チームワークの構造と機能:日本体育協会監修・勝部篤美・糸野豊編,コーチのためのスポーツ人間学,p256,大修館書店.
- ・デーブラーH./谷釜了正訳(1985)球技運動学,p89,不昧堂出版.
- ・ミンツバーグ H/北野利信訳(1991)人間感覚のマネージメント.
- ・村木征人(1991)スポーツ科学における事例研究の意義と課題—コーチング理論と実際の乖離接地を避けるために—,スポーツ運動学研究4.
- ・中西康己(2002)競技スポーツにおけるバレーボールのチームづくりに関する研究—T 大学女子バレーボール部の2002年シーズンについて—,スポーツコーチング研究,第2巻,1号.
- ・吉田敏明(1984)バレーボールにおけるチーム・エンジニアリングの要素,東京学芸大学紀要第5部門,36,211-217.
- ・吉田敏明(1993)チームづくりに関する事例的研究—大学女子バレーボールチームの場合—,スポーツ運動学研究6,11-22.